

県中教研 道徳部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 古川 順子
題 字 金山 泰仁 先生

明確な指導観をもつ

指導主事 阿尾 美晴

道徳が中学校で教科化されて2年が経とうとしています。各学校では、「特別な教科 道徳」の授業の在り方について日々研修、授業実践を重ねておられることでしょうか。道徳科の担っている役割を実現するには、教師が「明確な指導観をもつ」ことが大切です。

中学生の発達段階は、道徳的価値を頭で理解していても行動に移せなかったり、本音で語ることが難しかったりする時期です。そこで、「なぜできないのか」について真剣に考えることが大事になります。道徳科の授業は、答えが一つではない課題について、一人一人の生徒が多様な考え方に触れながら自分事として受け止め、道徳的価値の自覚を深める時間となることが求められます。

県内中学校の道徳科の授業では、道徳的価値の自覚を深めるための様々な試みがなされていました。

道徳的価値のよさや大切さだけでなく、人間の弱さから道徳的価値の実現が難しいこと、そして、道徳的価値の実現に向けて多様な感じ方や考え方があることを理解できるようなしかけがありました。本音を引き出すための発問や問い返し工夫、多様な考え方に気付くための構造的な板書、一人一人が自分の中の葛藤や揺れを自覚するための心情円の活用等です。これらは、教師に明確な指導観がなければ講じられない手立てです。生徒に「どんなことを考えさせ、何に気付かせたいのか」といった教師の明確な意図があって、はじめて生徒は道徳的課題に対する自分なりの答えを見出すことができます。明確な指導観は、悩みや葛藤が生じたときに生徒が自己や他者との対話を通してそれを克服するための道標となるからです。

教師が明確な指導観をもって仕組む道徳科の授業の積み重ねが、よりよく生きようと自分で考え判断し、状況に応じた答えを見付ける生徒を育てることにつながると考えます。

(西部教育事務所)

生徒と共に考え、語り合う道徳へ

部長 古川 順子

令和元年度より全面実施となった「特別の教科道徳」は、現在そして未来を生き抜くため、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者とよりよく生きるための基礎となる道徳性を養うことを目標としている。教科化することで確実に授業を行うだけでなく、分かり切ったことを言わせたり、作者の心情理解のみに偏ったりした指導からは脱却し、様々な道徳的諸価値について自分自身で考え、他者の意見を聞き合い、さらに自分の考えを深めるような授業への転換ともなった。

以前、「議論し、自分の考えを深める道徳」の授業を参観したことがある。主人公の取った行動について、気持ちの面から考え発言する生徒、きまりの面から自己を律する大切さを述べる生徒、主人公が対応した相手の心情面から訴える生徒、社会的な見方について考える生徒、自分だったらと悩み、語る教師。生徒も教師も、自分の思いや考えをさらけ出していた。休み時間になっても、教師のまわりに生徒が集まり、語り合いが続き、「今日の道徳、今までで一番難しかった」という声が響いていた。第64回研究大会での授業においても、構造的な板書が効果的にはたらき、生徒同士の考えをつないだり、ぶつけ合ったりしていた。また、多面的・多角的に考えを深めることで、学級全体が、主人公の行動について考え、熱気で満ちあふれていた。

今年度の道徳部会は、指導と評価の一体化を意識した研究を行ってきた。生徒が、様々な意見や考えに触れることで刺激を受け、自分の考えが変化し続けていく。それを教師が認め、評価することで、生徒自身が自分の考えの変容や道徳的価値の多様性に気が付くことにつなげていきたいものである。そして、教師は中心発問を押さえた後は、教えるというよりも生徒と共に考え、語り合う道徳の授業の展開を目指していけたらと考える。

(富・呉羽中)

第64回 研究大会報告

東 部 地 区

黒部市立明峰中学校

〈第2学年〉 平 雄造 教諭

川村 直弘 教諭

主題 安全につながる日常の大切さ A

教材 「田老の生徒が伝えたもの」

(出典：東京書籍「新しい道徳2」)



資料を通して、自身の生き方を見直すとともに、今後の生活について考えた。導入では、東日本大震災での津波被害や田老の町についてICT機器を用いて確認し、生徒の学習意欲を高めていた。

中心発問では、ペアで意見を共有することで、安全に配慮した調和のある生活を送るためには何が大切であるか、考えを深めていた。

授業は個からペア、全体での発表という流れで行われ、積極的な発言が多くみられた。ペアをはじめとした小グループでの話し合いを取り入れることで、生徒が互いの意見を交流する機会が保障され、道徳的価値を多面的・多角的に捉えられていた。

海見英理指導主事、伊勢威知郎指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・東日本大震災の被害に対する認識、理解の差があったが、導入時にICT機器を有効に活用したことで埋めることができていた。
- ・直接的に自分の生活に結び付ける道徳の時間の発言が、のちの人間関係等に影響することもあるので、「自分だったら」という問いかけには留意する必要がある。

〈第3学年〉 宮本 典子 教諭

主題 強く生きていくために A

教材 「高く遠い夢」

(出典：東京書籍「新しい道徳3」)

より高い目標の実現を目指し、粘り強く自らの人生を切り拓いていこうとする意欲を高めることをねらいとした。

授業で「ココログノート」を効果的に活用することで、生徒は自身の考えをまとめ、それをもとに発表することができていた。

授業研究における部会協議は、少人数のグループとなって「よかった点、参考になる点」と「課題、取り入れたらよい点」を色分けした付箋に書くKJ法で行われた。ねらいにせまるための生徒同士の関わり方や、発問等についての話し合いが活発に行われた。

能瀬明指導主事（東部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・夢をもつためには、心が健康でなくてはならない。そのためにも、生徒一人一人の心の状態を繊細に読み取り、寄り添ってあげることが大切である。
- ・道徳の授業では、生徒が自分との関わりの中で道徳的価値の理解を深めているか、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているかを重視することが重要である。このことに対して評価をし、生徒に返す必要がある。



仙名 駿佑（魚・西部中）

〔研究主題〕主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。－評価との一体化を意識した指導－

西部地区

南砺市立井波中学校

■西部地区大会では、南砺市立井波中学校を会場に高瀬まり教諭、大浦瑞紀教諭による研究授業が提案された。両授業ともに、事前に授業を録画したものをテレビで視聴した。授業記録や板書写真が用意されており、授業の流れがよく分かった。

〔第1学年〕高瀬 まり 教諭

主題 安全な生活のために A

教材 「山に来る資格がない」

〔出典：東京書籍「新しい道徳1」〕

録画映像を視聴する前に、授業者から授業参観の3つの視点（①主題とねらいの関連、②発問の工夫、③ループリック評価）が示された。

授業の導入では、事前にとったアンケート結果を基に、これまでの生活を振り返る場面があった。中心発問では、登場人物の気持ちや思いを、それぞれの立場から多面的・多角的に考えさせるため、心情円による自分の考えの表現やペアやグループでの話し合い等の手立てをとっていた。また、生徒の発言に対する問い返し、意図的な指名があることで、多様な考えを引き出していた。終末では、本時を振り返り、これからの自分の行動について考えていた。

部会協議では、高瀬教諭が提示された3つの視点に沿って協議を行った。

- ①生徒の発言には、主題に迫る反応があり、道徳的価値についての理解の深まりがみられた。
- ②中心発問に対して、自分の考えを心情円で表す際に、心の中を割合で示すことができればよかった。
- ③道徳科でのループリック評価は有効ではないが、ローテーション道徳を行う場合は、指導の参考となる評価法だと考える。

阿尾美晴指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・事前にとったアンケートは、生徒の考え方を把握するために有効であった。
- ・ペアで伝え合う場面では、意見の交流が盛んに行われ、全体の場で発言するときの自信につながっていた。
- ・心情円については、二者択一ではなく、心の動きや葛藤に気付かせるためにも割合で示せるものがよかった。
- ・揺さぶりをかける問い返しが、生徒の本音を引き出していた。また、じっくりと考えさせる時

間を確保することで、生徒それぞれが自己との関わりで捉え、安心して多様な意見を出し合う様子がみられた。

老田 克己（射・大門中）

〔第3学年〕大浦 瑞紀 教諭

主題 より高い目標を目指して A

教材 「高く遠い夢」

〔出典：東京書籍「新しい道徳2」〕

録画映像を視聴する前に、授業者から授業参観の3つの視点（①発問（問い返し）、②ネームプレートの使用、③ループリック評価）が示された。

教材の分量が多いため、2時間扱いとした。前時に本文の内容を捉えさせておいたため、本時で生徒は発問について考える時間を十分にもつことができた。授業では、発問に対する生徒の立ち位置（考え）を明確にするためにネームプレートを黒板に提示することで、学級全体の意見がどのようになっているのかを確認できた。教師はネームプレートの位置を見ながら、意図的に指名していた。

生徒の到達度をはかるためではなく、生徒の活動を通して、授業者の指示が適切かをはかるためにループリック評価を導入した。内容や活用方法については今後も検討の余地があると感じた。

部会協議では、大浦教諭が提示した3つの視点に沿って協議を行った。生徒の話し合い活動では各班で積極的に話し合いが行われていたという意見が多かった一方、多様な意見に触れることが大切にされている中、班の意見を一つに絞る必要はあったのかという意見も出された。

藤田みゆき指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・ビデオ編集に加え、授業記録を準備されるなど、細部にわたって準備いただいたことに感謝したい。
- ・中3という時期を考えると、生徒には授業の中でじっくりと考えさせたい。中心発問で主人公の想いを考えさせた場面で、先生はキラリと光る問い返しを何度もされ、生徒の考えをより深めていた。
- ・最後に生徒が自分をみつめる場面で先生がまとめてしまったことが残念だった。自分事として考えさせ、意見を生徒から出させたかった。

矢野 清一（高・志貴野中）

研究大会開催にあたっての「コロナウイルス感染拡大防止対策」

今年度の研究大会では新型コロナウイルス感染拡大防止のため、東部・西部それぞれの授業会場校で感染防止のための対策が行われました。

【第64回東部地区大会】黒部市立明峰中学校で3クラスの公開授業

1 今年度の感染拡大防止対策

部会・会場校独自の対策として、①受付、授業会場、協議会場に消毒液を設置、②受付でのお茶配布と控室湯茶の廃止、③廊下からの参観（廊下側はすべてガラス窓、ガラス扉であるため）、④授業会場付近のオープンスペースにTVモニターを設置、⑤参観授業の割り振り、⑥広い空間での協議会実施等の対策を取った。



2 参加者からの意見と改善の方向性

参加された先生方からは、「廊下からとTVモニターでの参観だったが、学級の様子をしっかりと見ることができた」という意見があった一方で、「音声や画面の大きさの点で聞き取りづらい、見づらい部分があった」等の意見もあり、来年度以降も対策が求められれば、事前の録画や特別教室で間隔を十分にとつての授業の実施等の案も検討材料として挙げられる。

遠渡こずえ（黒・明峰中）

【第64回西部地区大会】南砺市立井波中学校で2クラスの授業ビデオ視聴

1 今年度の感染拡大防止対策

事前に授業を撮影し、録画映像を見ての参観とした。また、使用後の机、椅子は参加者で消毒を行った。



授業会場では、本時の授業につながる事前の授業の様子（板書、掲示物）等を掲示し、本時にいたる授業の流れがわかるように工夫されていた。

2 参加者からの意見と改善の方向性

生徒との接触機会を排除し、感染防止に努めることができた。録画映像の視聴中では、授業者の思いや意図を確認しながら、授業を参観することができ、よかったなどの意見があった。

反面、会場校には事前準備について、これまでより負担を強いることになっているため、部会でのビデオ撮影の協力体制を強化することで、負担軽減を図る必要がある。

下村 喜一（小・蟹谷中）

